



小 / 理科 / 5年 / 生物と環境 /
植物の発芽と成長 / 理解シート

たねの中のデンプンは、どのようにしてつくられるの



日光や水、空気、^{ひりょう}肥料があるところでは、植物は、緑色の葉の中でデンプンをつることができるんだよ。

植物は、自分でデンプン（栄養分）をつることができる

動物は、水だけあたえられても、食べ物がなければやがて死んでしまいます。ところが、地面にはえている植物は、何もやらなくても、雨さえふれば葉を広げて大きくなり、実もなるようになります。

植物は、地面にふくまれているわずかな肥料や水をすい上げ、日光の力をかりて、緑の葉の中で、デンプンをつることができるのです（これを^{こうごうせい}光合成という）。このとき、空気中の^{にさんかたんそ}二酸化炭素も使っています。

日光をあびたたくさんの葉の中で、せっせとつくられたデンプンは、植物の体が大きくなる時のエネルギーとして使われるほかに、実や球根、たねなどに運ばれ、たくわえられるのです。

日光が少ないと、実やたねはできないことがある

平成5年（1993年）の日本の夏は、天候が悪い日が続き、雨やくもりの日が多くて気温も上がらず、日光がさす時間がきょくたんに少ない年でした。そのため、イネが実らず、米不足で海外からタイ米などを輸入して^{ゆにゅう}大きわざになりました。スイカや20世紀ナシなどの^{くだもの}果物も実がならず、野菜も不作でした。

日光に当たる時間が少なければ、植物はデンプンをつることができず、実もたねもつけれないし、大きく育つこともできなくなるのです。

そのため植物は、できるだけ日光がどの葉にも当たるような^{えだ}枝や葉のつき方をしているし、必ず、日光が当たる方向に枝を広げていきます。

のき下にはえた木の枝が、ひどく曲がっているのは、日なたを目指していたんだね。

